

‘09 オシドリの巣立ち「母鳥の四つの顔」

札幌市南区にあるM中学校のグラウンドの真ん中に立つ樹齢300年のハルニレの樹洞。05年・07年・08年に続いて今年もまた、そば降る雨の中、人気のない日曜日、オシドリの巣立ちのドラマは始まった。ゴールデンウィークに、オシドリが抱卵しているのを確認してから、28日後のことである。

オシドリは水辺の近くの樹洞に産卵し、雌だけが28日から30日間抱卵する。雌はその間、毎日2回、朝と夕方1時間～2時間程度の採餌にでかける。ここ曙中のオシドリは採餌の際には、雄と待ち合わせ、雄はナイトのように寄り添って、巣穴まで雌を送り届ける。そんな姿は巣立ちの2～3日前まで見られる。巣立ちの前日、雛が孵りだすと、雌は夕方の採餌を止める。そんな定説を、私達は3年間の観察の中から確信していた。

抱卵を確認してから27日目の夕方、雌が採餌に出かけるのを確認した。「明日の巣立ちの可能性は低い」と、関係者に連絡。そして翌朝、巣立ちの様子を撮影してもらえることになった動物写真家の稗田一俊さんと、抱卵を確認してから毎日観察を続けているNさんが、4:20から5:40まで、巣穴を観察するが朝の採餌が確認できない。Nさんは一度帰宅するが、



(撮影者：稗田一俊氏)



(撮影者：稗田一俊氏)

「観察する前に既に巣に戻っているのか、それとも巣立ちの予兆なのか」心配なので8:30過ぎもう一度グラウンドに確認に行くとのこと。曙中に着いてグラウンドの周囲を歩いてみるが異変はない。雨に濡れながら静かに佇むハルニレ、ぬかるみ始めたグラウンドで、野球部の中学生が部活の中止を確認している。今日の巣立ちはやほりないのか。雛が飛び降りるであろう辺りに、古いロープが放置されているのに気付いて片づけに近づいたその時…。

8:50 巣穴の入り口の奥に母鳥が顔を出しているのを見つけた。あわてて観察体制に入る。9:30頃から10分おきぐらいに母鳥は頭を出して外の様子を伺うようになる。10:00、朝早くから撮影に来て、いったんグラウンドを離れていたカメラマンの稗田さんが戻ってきて、雨避け対策に苦労しながらのハイビジョンビデオカメラの撮影が始まった。撮影が始まって1時間位が過ぎた頃、一瞬目を離した隙に、今年の巣立ちが始まっていた。気付いたときには、ハルニレの木の根元に母鳥と数羽の雛が降りていて、残り1～2羽のジャンプを辛うじて見ることが出来た。

これから数時間の間に私は、母鳥の四つの顔を見ることになる。

ビデオには、11:20から38秒間に14羽の雛が7メートルの高さから飛び降りる姿が映し出されていた。ハルニレの根本にわずかに残る草陰に一団となった彼らは先ず私達から身を隠す。「警戒の顔」、これが第一の母鳥の顔。草陰から首を伸ばして細心の注意で辺りを見回す。やがて、2～3メートルは草に身を隠して抱腹前進、グラウンドにでた途端に雛たちは早足で、行進の塊が伸びたり縮んだりして、70メートルのグラウンドを横断する。わずか数時間前に孵たであろう雛たちの冒険はこうして始まった。

グラウンドの行進が始まって直ぐ、今年もまたカラスが雛たちを襲う。「戦いの顔」、これが第二の母親の顔。雛たちが一塊りになっている限り、カラスも雛を襲うことが出来ない。それでも時々一羽が群から離れかかる。カラスが狙う。母鳥は自分の何倍も大きいカラスに嘴を尖らせ威嚇する。時には、数メートルも追い回す。これにはさすがのカラスも遠くから眺めるだけ。やが



(撮影者：稗田一俊氏)

てフェンス際の草むらに到着、しばしカラスからは身を守れる。

草むらに入った一団は全く姿を見ることが出来ない。時折草が揺れるので、そこにいるなと分かるだけ。しかし彼らの向かう方向には、グラウンドの端に巡らされている金網のフェンスとそのコンクリートの基礎部分が有り行く



(撮影者：新田)

手を遮る。幾度となくフェンス際を行ったりきたり、時には休みながらも、一心の姿に都会に生きる残酷さを感じる。

11:45分頃、私達は、フェンスの切れる校門から国道横断へと彼らを誘導する事にする。今年も国道横断時に交通整理をお願いしていたお巡りさんの到着を待ってから、部活を終えた中学生2人に、雛たちが校門から真っ直ぐ国道を横断して公園へと向かうように、歩道に立ってもらう。みんなが配置についたのを確認してから、私はフェンス際で行きつ戻りつしている母鳥と雛の後ろに立つ。彼らと一定の距離を保ちながら、母鳥の警戒心を押さえながら、少しずつ間合いを詰めて、校門へと誘導する。校門までもう少し、グラウンドから2メートルぐらいの法面を降りようとして、母鳥は突然振り向いて私を見た。「信頼の顔」これが第三の顔。あれだけ人間を警戒していた母鳥の目が、私にはその時確かに、「本当に大丈夫」と問いかけられたように思える。いやおそらくは諦めの顔だったのかも知れないけど、その直後、意を決したかのように、校門から公園へ、車の途絶えた国道を堂々の母鳥とよちよち歩きの雛たちは横断した。

11:57公園の中にある垣根に潜り込んだ彼らは、しばしの休憩に入る。

13:02行進開始。真駒内川に行くまでには、もう一度、公園の中を通る広い道路を渡らなければならない。もうお巡りさんはいない、私達も手伝えない。母鳥は、左右からの車が来ないのを確かめるように、横断を開始する。「今だ行け!」、おっと車が来た。もう一度公園の草むらを歩いて違う場所から再チャレンジ。また、車の往来が切れたのを見計らって、母鳥はハルニレの木の下で行進が始まったときのよう身を屈めて横断を開始する。雛たちも母鳥に続く。「危ない」車が見えだした。間一髪、母鳥と12羽の雛は無事に道路を渡りきって、川に近い草むらに消えた。まだ縁石を超えられない2羽の雛が、必死にはい上がろうとする。どのくらいの時間もがいていただろうか。やっとはい上がったけど、母鳥の姿は草の中にもう見えない。何処にいるのと一生懸命泣き叫ぶ2羽の雛に、母鳥の声が聞こえる。しとしと雨は巢立ちの頃から止む事なく降り続けている。もうすぐ真駒内川に到着する。

私達は着水の様子を見ようと橋の上に先回りして彼らを待つ。13:11母鳥が川に入ると同じ時、雛をくわえたカラスが上空を飛ぶ。さっき遅れた雛だろうか。2本の道路の横断に成功し、雛たちは都会の危険から逃れ、もう少しで行進も終わるのに。私達との距離も離れかけたとき、今度は自然の摂理が彼らを襲う。



(写真：新田)

私達の目の前で一羽が欠けたが、13羽の雛と母鳥は私達がいる橋から数メートル下流の水面を泳ぎ周り、やがて岸に上がり、2:20わずかに残る河畔木と少しばかりの草の中に身を置いた。雛たちは時々母鳥の背中に乗ったりしながらも、やがて母鳥のお腹の下に全ての雛が入り込んで、母鳥はやっと「安堵の顔」。これが第四の顔。3:30、こうしてオシドリは巣立ち第4章の序章を終えた。昨年一昨年は、真駒内川に着水後は、休むことなく、流れに乗って公園内にあるサケ科学館の脇を通り、豊平川の合流地点までたどり着いている。しかし今年、この合流点の河畔の様子は一転し、河川の安全のために（開発局説明）と言うことで、80パーセントの間伐が行われ、水鳥たちが隠れるブッシュが無くなっていた。今年はこの先何処に向かうのだろうか。オシドリが来た！と喜んでいるうちに、彼らの生きる環境は確実に狭められている。川で生活する彼らが、森の大木に営巣し、森で生まれた雛が川へと戻る。グランドの大木が、森の大木に代わっただけと言えるだろうか。複雑な思いで、彼らとまたどこかで会えるのだろうか。

(小林保則記)